
バレット・ブルー

kazaisyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレット・ブルー

【Nコード】

N0680X

【作者名】

kazaisyu

【あらすじ】

《イクリプス》。かつて地球人口の三分の一を消滅させた悪夢。悪夢から背を向けた人類が向かったのは宇宙だった。新しい世界、コロニーへと居を移して。しかし、そこに待っていたのは決して希望などではなく……。学園スペースオペラ、ここに開幕。

(HPと並行して隔週で連載中。URL: http://amatereasu.buzama.com/syou/bulletbullet/rrb_title.html 更新はHPの方が早いかも?)

プロローグ

鋼鉄が疾駆する。

強化合金によって作られた銀色の壁柱が、瞬きほどの速さで後方へと流れていく。

その数、四。

それはまさしく、流星であった。緋と銀の色で彩られた、一筋の流星。それが宇宙という漆黒を、美しく、しかし暴力的なまでの速度で滑り落ちて行く。

それが本物の、鉄の流星であったならば、違いなく人類にとっての脅威であった。

しかしそうではない。もし速度を度外視したとしたら　はつきりと見えたはずだ。

その鋼鉄が、人型であることに。

しかしたとえそれが流星ではないとしても、脅威という意味では、同じかもしれない。

それは機械である。それは兵器である。

容赦もなく人を踏みつぶし、銃弾をばら撒き、全てを無意味な残骸に変える。四メートル級の鉄の巨人は、間違いなく、ヒトに対する脅威であるに違いないのだ。

流星の如き残影は、軌道エレベーターの内側を、影から影へと駆けて行く。

『 目標地点まで、残り六秒です』

(目標?)

スピーカーから流れる声に、はっとした。

……不意に、脳裏に冷たい電撃が走る。

(え?)

自分はいつたい、何をしているのか？　ここはどこだ？

目標とは何なのか。そして自分の駆る、この機械は何なのか。

不意に、分からなかった。

『目標地点まで残り三秒です。減速してください。警告です、減速してください』

突然のアラームと共に、眼前の画面に赤い警告画面がポップした。スピーカーから流れる女性の人工音声、警告を告げている。

(減速……！？)

わけがわからないまま、手元にあるレバーを後ろに倒した。

がくんつ、と機体が大きく揺れる。それと同時に、先ほどまでにあつた重く苦しい重圧が遠のいていく。だが……それだけで済んだわけでもなかった。

同時に、まるで振り回されるように、コックピットが二転三転する。錐揉状態で落下しているのだと、不意に気づいた。ここは恐らく、有効重力圏内だ。

『姿勢^{AC}制御、十パーセントに減衰。警告、アティテュードコントロール、システムでは回復できません』

脳裏に幾重もの警鐘が鳴り響き、未だにまったくの状況がつかめないまま、両手がシートの左右に四本配置されたスティックへと伸びる。

そこから先、どうやったのかは、自分でもよく分からなかった。

ただがむしやらにスティックを操作し、どうにか回転を止め、姿勢を安定させる。同時、かつてシステムが警告した三秒間が経過し、軌道エレベーターの壁面を、足の裏(といっても機械の、だが)で火花を散らして削り取りながら静止する。

「はあ……はあ……」

『アティテュード、クリア。機体制御、回復。速度の停止を確認。作戦目標地点に到達しました』

(なんだってんだ……！)

毒づく。しかし急激に圧迫から解放された肺が、言葉を放つこと

すら許さない。早鐘のように脈打つ心臓は、痛いほどに呼吸を圧迫していた。

状況が分からない上に、この有り様である。当然ながら、頭の中は混乱の極みにあった。

そんな彼が、毒づく以外に、意味のある行動を起こせたのは……
眼前の光景が、あまりにも美しかったからである。

息を呑む。

そこには 地球という名の、惑星^{ほし}が、あった。

地球、という名の惑星^{ほし}がある。

太陽系に属し、海があり、空気があり、生命とがあった。そういう惑星である。

しかし、たったそれだけで、語る言葉が終わるはずがないのだ。
我らの……母なるこの星が。

太陽系第三惑星、人の故郷。……言葉を重ねたところで、そこには本当の真実はない。

地球は我らが故郷にして、今や帰れることのない死の大地なのである。

破綻は、ある日突然に訪れた。

千死病。片隅で生まれたその病は、しかし二百七十四日という短さで、世界を席卷した。

それはまさしく災厄であった。あらゆる対策手段が生まれ、その悉くが水泡に帰し。ついに、虐殺という名の隔離政策さえもが無駄だと悟った人類は その頃ようやく現実化した、宇宙移民政策に

縋りついた。

……そしてその時既に、人類は、三分の一以下という悪夢のような数へと減じていた。

イクリプス。

その悪夢は、そう呼ばれた。

人は、地球を捨てた。

これは比喩ではない。事実、人々は、自らを殺し尽くさんとする悪夢から逃げ出し、そして生き延びた。これは何も驚くことではないし、不自然なことでも、責められるべきことでもない。

生きようと欲する意思こそが、命が命として在る源泉である。そういう意味で、彼らは英断した。

人は 宇宙に救いを求め、そして救われたのだ。

しかし、救われなかった者もいた。

宇宙を眼の前にして、病に倒れたものがいた。

狂気と恐怖に唆された人々による、戦争と言う名の殺戮もあった。

自ら地球に残り、悪夢と戦うことを選んだ人々もいた。

かくして時は流れ。

世界も、悲劇も、止まることはなく。

そして 二百年と言う、長い月日が流れ去った。

斯くして物語は紡がれ始める。

それは宇宙での物語。コロニーと呼ばれる新たな世界で、人々は歩み始める。

その先にあるものが、希望であるのか、絶望であるのか、それすらも分からないまま。

プロローグ（後書き）

はじめまして、kazaisyuと申します。この度は拙作を閲覧頂き、誠にありがとうございます。隔週にて定期連載予定となっております。

第一話 いつもの朝に

最初に見たものは、見慣れた白い天井だった。

最初に聞こえたのは、耳慣れた時計の音だった。

何の変哲もない、いつもどおりの部屋だった。そこにあるのは静寂と、静寂に紛れるわずかな息遣い。

部屋の中には、二人の人間がいた。要約すれば、自分と、誰かだ。………」

睡眠からの覚醒。身体状態を確認 異常なし。危険がないらしいことは、すぐに分かった。自分でない一（誰か）………要約すれば侵入者は、寝息を立てていたからだ。

この時、彼は既に気づいていた。何が起きているのか。侵入者は、誰なのか。

ベッドの上で、天井を見つめていた目線を、ベッドの上へ下ろす。そこには、スヤスヤと寝息を立てる、金髪の少女がいた。自分の胸の上で、しかも割と幸せそうな顔で。

再び天井を見る。

……状況だけ見れば、恋人か夫婦が情熱的な夜を過ごした、その朝だ。

だが、二人がそんな関係であるわけもなく 当然、そんな事実がないのも自分が誰よりもわかっている。昨夜ベッドに入り、就寝するまでの間、確実に一人だった。

となれば、結論はひとつしかない。

こめかみを押さえながら といっても、両手を少女に封鎖されてしまっているわけだが 溜め息を吐く。

こういふ場合の対処方法は、既に確立されつつあった。

とりあえず、息を吸い込む。そして

「キルヒアイゼン上等兵！ 何を寝ている、さっさと起きろ！」

怒鳴りつける声に、はうあっ、と眼を見開いたかと思うと、金髪

を翻す暇もないほどに迅速に、ベッドから降りて敬礼した。

と、今度はぱちくりと眼を瞬くと、こちらの顔を認めたのか、あ、という顔をした。

その少女の姿は、一言でいえば、可憐だった。すらりと伸びた手足の細さは、『華奢』といって違いないレベルである。さらさらと光るような金髪をポニーテールにまとめ、瞳は美しいスカイブルーを写し取ったかのような蒼。

その造形は、男が見れば十中八九見とれてしまうに違いないほどの、金髪碧眼の美少女だ。こんな美少女に朝から抱きつかれていたと思えば、鬱陶しい気持ちもどこかにいつてしまう。それも事実である。

ゆえに、彼 九桐斎くどうさいは、いたって平静に、優しく朝の挨拶をした。

「……おはよう」
とりあえず挨拶をすると、「あわ、あわわわ」と慌てふためき始める。

普段の（それなりに）凛々しい姿を見てみると、どこか笑いを誘う光景ではある……のだが、今笑えば彼女の自我を崩壊させる契機になりかねないので自粛した。

「お、おはようございます、ちゆ その、斎さいさん」

「ああ、おはよう、クリス。とりあえず、俺のベッドで寝てた理由について聞かせてもらえるか？」

いや、その、と口を変えながら金魚のようにぱくぱく口を開閉する少女。白磁のような頬が真っ赤に染まっている。

そして唐突に、「失礼しましたーっ！」とダッシュで逃げ去っていった。

これもまた、見慣れた光景とえばそうである。

（どうせ、また酒でも飲み過ぎたんだろ……）

クリスティーナ・キルヒアイゼン。それが少女の名前だ。故あって今は共に暮らしているが、別に血縁関係があるとか、そーい

うわけではない。

もちろん恋人でもなければ夫婦でもない。

言ってしまうばただの同居人で、書類の上でももちろんただの他人だ。敢えて形容するならば……保護者、といったところだろうか。実を言えば、『もうひとつの』名前を聞けば誰もが驚く類の有名な人でもあるのだが、彼女がその話を嫌がるので、ここではやめておきたい。

ちなみに、見た目からはまだ十代の少女にしか見えないが、実は二十歳を超えている。

彼女が酒を飲み過ぎて酔い潰れ、挙句人のベッドで寝る、というのは実は割とある。人が眠っているベッドにもぐりこむ、ということも少なくない。

(弱い癖に飲みすぎるのが悪い……)

駄目人間、というような類の少女ではない。むしろ規則正しい生活を送っている方だ。

ただ、朝も夜も問わずに怒涛のように襲いかかる類の仕事は、彼女の中にもどうしてもストレスを蓄積させてしまうのだろう。

とはいえ、ストレスのはけ口を酒ばかりに求めていては、体によくない。そろそろ何かひとつ趣味にでも目覚めて、新しいストレス発散方法を彼女も編み出すべきだろう。

うんうん、と頷きながら、彼女が秘蔵している酒類の類を、今度どこかにひっそりと隠しておいてやろうと思った齋である。

無論、彼女が知れば泣いて止めるだろうが、それで全てが片付くほど人生は甘くない。今のうちに、そういうことを叩きこんでおいた方が彼女の為だ。きつとそうに違いない。

密かな決意を固める齋のことを、朝ごはんを支度すべく台所で駆けまわるクリスを知る術は、無論なかった。

「しちそうさま」

「しちそうさまです」

クリスの作った朝食（ちなみに斎の希望で今日は和食だ）に下鼓を打った後、残った食器を重ね、台所まで持って行く。

それに倣ったクリスに、斎は片手を振った。

「ああ、置いといてくれ。片づけておくから」

「あ、すみません」

敬語で彼女が返す。しかし家事は分担だと最初に決めているので、斎としてはごく当たり前のことでしかない。

ちなみにだが、彼女の方が年上であるので、当然ながら敬語は本来必要ない。が、忠告するたびに「好きでやっていることです」と返され、苦笑はしても止めてはくれないのだ。

とはいえ、彼女との付き合いも長い。もう慣れたが、若干むずがゆい時もある。

ちなみに最初はと言うと、むず痒いどころか勘弁してほしいと思っただけだ。そう思えば、なるほど、人間は成長する生き物だと実感する。

「そういうば斎さん、今日は入学式ですよね」

「ああ」

四月一日。春の訪れるこの季節は、ここ日本ではごく当たり前に入学式の季節である。

当然斎も、その準備は昨日のうちに済ませてあるので、クリスの手を煩わせるところはない。疑問に思いながら、素直に頷いた。

「その入学式って、私も……その、行っていいんでしょうか？」

ん？ と眼をやると、彼女の頬は若干朱に染まっていた。

当然ながら、入学式にも父兄の参加枠というのはある。確かに、説明会の時に、もらった書類の隅に書いてあった記憶があった。彼女の仕事についても、今日は休みだと聞いている。ただ……

「……目立つからな、君は。俺の知り合いだとバレたら、少し面倒だ」

「だ、大丈夫です！ 潜入任務も経験があります！」

「そういう問題ではないんだが……」

ただ、彼女の名前は嫌というほど知られているが、顔は実のところあまり知られていない。本人が写真を撮られるのを嫌がるからだ。何でも、写真は嫌いなのだと聞いたことがある。

(……フム)

皿を無意識的に洗いながら思索する。その間も、彼女はずっとこちらを見つめていた。

「……まあ、別にいいか」

「い、いいんですかっ!？」

飛び上がるように　あるいは飛びつくかのように　ぱっと彼女は顔を輝かせる。

何がそんなに楽しいのか分からないが、まあ、別にバレないだろう。万が一バレたとしても、自分の知り合いだということは彼女も明かすまい。

第一、彼女は既に何度か、買い出しで外に出ている。それでもバレていないのだから、それほど難しい話でもないはずだ。

「ただ、ある程度の変装はしてきてくれ。帽子を被るぐらいでもいい。バレないに越したことはないからな」

「了解です!」

それを聞くや否や、彼女はダッシュで部屋に駆け込んだ。苦笑しつつ、その背中を見送る。

(まったく……思い立ったら速いな)

いつもそうだ。いつでも全力。そんな彼女だからこそ、少しばかりのわがままなら聞いてやりたくもなる。

……ただ、この時の彼は、若干見通しが甘かった。

それを彼が認めざるを得なくなるのは、あと三十分は先の話のだが。

塞翁が馬、という諺がある。

幸運が転じて不幸となり、不幸が転じて幸運となる。

そういった意味合いであるが、当然、そうでないことの方が圧倒的に多い。不幸は所詮、不幸以上の何ものでもないし、幸運は所詮幸運であつて、必然ではない。よつて、何の気もなしに不意に起こるし、そしてその偶然が、或る一人の人生すらも壊してしまうことだつてある。

不幸にせよ、幸運にせよ、それは同じことだ。

よつてこの時、九桐斎の身に起きた不幸が、後々になつて取り戻せるとは断言できないのである。そして断言しよう。彼女の身に起きた事件は、あくまでも事故であつて、故意ではない。断じてない……さて、では言い訳をしよう。

食器を洗え、まずランニングに向かつた。日課である。約12kmの距離を走り終えたとき、既に三十分は経過していた。

そして学校へ行く準備を整える。服を着替え、支給された鞆の身を確認し、部屋を出る。

さて、それじゃあ時間もあるし、クリスに準備が出来たか声をかけてみるか、ということ唐突に思い付き……そして、それが悪かつたのだらう。

トントン、と部屋のドアをノックし、そのままドアノブを握る。

「準備は出来た……か……」

言いながら、がちやり、とひねつた。言葉の最後が消えかかつていったのは、その先にあつた光景に、思わず絶句したからである。

そこには、ズボンを脱ぎかけた状態のまま硬直した、金髪の少女が居た。

上に着る白い服ははだけられ、彼女の前に設置された鏡からは、純白のブラが覗いている。そして眼前には、純白のパンツに包まれた彼女のお尻。

彼女のスタイルの良さと肌の白さに改めて驚かされながらも、この段階で、既にもうどうしようもない窮地に立たされてしまったの

だと、九桐斎は理解した。

そして起こせるアクションは、彼の場合たった一つ。

「……失礼した」

がちやり、と扉を閉めて外に出る。

『%っ!?!#@ っ!?!?』

扉の中から、言葉にもならないような悲鳴が轟いた。

「……すみません……」

それから十分後。斎による誠心誠意をこめた（扉の向こうからの）謝罪によやく折れたのか、がちやりと彼女はドアを開けた。

おずおずと頭を下げたその顔には、申し訳なささと恥ずかしさが半分半分くらいで映っていた。未だ頬を若干赤く染めつつも、こちらに視線を合わせようとはしない。

「お待たせしてしまつた拳句、お見苦しいものを……」

「いや、お見苦しくはない。クリスマスは綺麗だからな」

言つたとたん、「はうあ」とクリスマスはまたもや頬を染めた。褒め言葉に弱いことは普通の経験から分かり切っている。こ誤魔化されるのは彼女としては本意ではないだろうが、無論、彼女が綺麗だと思つのも真実であるから問題ない。

……ともあれ、そんなこんなで。ようやく、彼らはそうして家を出た。

登校路を並んで歩きだす。

お互いの服装としては、斎は無論だがただの制服で、対して四五分という長い着替え時間を使ったクリスマスは、白のワンピースに鍰広の帽子……いわゆるサハリハット、という出で立ちであった。

こちらの視線に気づいたのか、クリスマスは少しだけ目をそらすと、ためらうように、言った。

「……その、似合ってますか？」

「ああ、とても」

お世辞ではなかった。クリスマスもそれを理解したのか、ぱつと花の

ような笑顔で嬉しそうに微笑んだ。

それに、とクリスは言った。

「髪も下ろしてますし、帽子で隠してますから、まずバレないと思います」

「そうだな」

確かに、いつものポニーテールが、今はロングヘアに変わっていた。美しい金の髪が、さらりと風に揺れる。

なるほど。目の前にこうしている彼女は、普通の少女だ。多少、というか、過分な脚色をせずとも十分すぎるほどの美人ではあるが、それだけだ。

斎の言葉を皮きりに、二人の間に満ちたのは、朝の静謐さを含ませた沈黙だった。

しかし不快ではない。それはお互いにだったのだろう。二人の歩く速度に、淀みはない。

「……学校かあ」

彼女が口を開いたのは、五分かけて歩き、ターミナルのゲートについた時のことだった。

ゲートで指紋とパスを認証し、構内に入る。ターミナルは、コロニー全体を縦横無尽に走る輸送エレベーター……通称『クレードル』のことだ。エレベーターといっても個室式で、最大で時速は300kmにも及ぶ。

しかし、今この『クレードル』は、やや斜め下方向に向かって、時速50km程度の緩やかな速度で輸送路を滑っていた。だが、たとえ300kmの速度を越えても、その振動や苦痛といったものはまったく内部には伝わってこなかっただろう。アーマードにも応用される、キャンセラー重圧軽減装置のおかげだ。『揺り籠』クレードルの名はここに由来する。

斎は、クリスの言葉に何も返さなかった。

返さなかった、というより、返せなかった……といったほうが正しいだろうか。そもそも今の言葉は、答えを欲している風でもなか

った。実際に彼女の視線は、自分ではなく、窓の外を流れて行く景色を見ている。

その視線につられて、同じく齋も外に眼をやった。

地面は、緩やかな湾曲を描き、そしてその端で、上空へと湾曲していく大地は、白い霞に隠されて消えていく。やがてそれは白から青へと代わり、やがて澄み渡る蒼い空に、薄い雲が流れていく。

それは偽物だ。ホログラム 本来は、この上空は誰かが暮らしている大地が見えるはずなのだから。しかしそうと分かっているにも、齋は、その空は美しいと思った。

だからきつと、地球の空はもつと美しいのだろう。

「綺麗ですね」

「ああ」

素直に答える。毎日のように見ているこの光景が、何度見ても飽きることがないのは不思議なものだ。本来、コロニーに青空はなかったが……精神的にどうかかというような話になったらしく、上空には、精巧な青空のホログラムが映し出されていた。

コロニー。かつて提唱され、そして様々な経緯を辿り、そして今に至った人の居場所。

それはかつて、宇宙にある仮初めの宿として造られた。しかし今や、人類が決して欠かすことの出来ない居住の地となっている。現在のこのコロニーの人口、363万人。

人は、コロニーで暮らし、コロニーで死ぬ。

もちろん、それが月ということもあるし、火星ということもある。あるいはもしかすれば、ようやくテラフォーミング《》が始まった、地球ということもあるかもしれない。

しかし総じて言えば。……人は今、宇宙で生きている。

不意に、クレードルの機械音声が、目的地への到着を告げた。

景色が急速に変化していく。クレードルが音を立ててその速度を弱めると、青空だった景色は漆黒に変わった。ターミナルの中に入ったのだ。

がしゃり、と音を立ててクレードルがドアを開く。到着だ。

さて、と鞆を掴む。

「それじゃあ、行こうか。学校に」

「はい」

微笑みながら頷いて、クリスも立ち上がる。

結局。最後まで、彼女の言葉の意味を聞けないままだったと、斎は思った。

だが、それでもいい。時間は山ほどある。聞きたい時に聞けばいい。彼女の話したい時に、聞いてやればそれでいい。

人生とはそういうものだ、と、斎は思った。

第一話 いつもの朝に（後書き）

拙作を読んで下りありがとうございます。本編突入です。少々遅い更新となってしまうかもしれません……。話数が話数なので、二話につき一話でまとめて更新しようと思ったんですが…それもそれで面倒なので。なお説明は読むのが面倒くささくなりかねないので極力少なめですが、世界観については徐々に徐々に明かされていく予定です。次回更新は10月9日ということ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680x/>

バレット・ブルー

2011年9月27日13時35分発行